

# わたしの聖戦

◎◎女性が働くといふこと◎◎ 45

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津江

## ボンカレーの思い出

記憶にあるかぎりでは、私にとって最初のインスタント食品は「ボンカレー」であった。

恐らく、日本の家庭で作られる頻度でいえばトッブを競う料理だと思われ、カレーが嫌いという人にお目にかかったことはまずない。

純粋な日本食でないにもかかわらず、これほどまでに深く日本の食卓の王座を占め、単純な素材でありながら各家庭ごとに微妙に違う味を編み出し、「ウチのカレーはね」とひとこと言いたくなるようなメニューがほかにあるだろうか。そんな身近なカレーは、程度の差こそあれ少々手

はじめにその存在が明らかになったときには、驚きというより漠然とした違和感と不安感みたいなものを覚えてしまったのにな。

1968年に売り出されて早や37年、時代は様変わりした。



のではなくなり、かえって手作り料理より美味しく感じることもあるくらいだ。くやしいような嬉しいような、である。

これより10年前の1958年に発売されたのが「チキンラーメン」、1971年には「カップ

ラーメン」がお目見えしている。これら3つは現在でもインスタント食品の主流を占め、パッケージや味に工夫を加えながら脈々と私たちの食生活をサポートし続けてきた。

忙しくなるばかりの現代人にとって、ボンカレーに代表されるインスタント食品は、その種類も数も瞬く間に増え続け、スーパーの棚の顔として定着してしまっただけ。各メーカーの競争の結果、味だって決して捨てたも

ようになつてくると、インスタント食品をベースにし、そこに野菜や乳製品などを加え「自分流」にアレンジする試みもごく普通に行われるようになった。

保存料や着色料など人体への害については忘れ、即効性のある害でないかぎり、便利さには到底かなわれない。解決すべき問題は将来の健康被害より今このときの空腹なのだ。生活全般がインスタント化され、本当に便利な世の中になった。私にしてみればその実感は「ボンカレー」からである。手作りの、あるいは本場インドのカレーとはまったく違う立ち位置にそれはあり、幼く何もわからなかつた良き時代のひとこまにも等しい。すべてが懐かしく好ましく思えるのは、年をとった証拠でもある。なかなか悪くない。

イラスト・三浦義雄